

## 宮内庁書陵部所蔵五卷本

### 『和剂局方』について

小曾戸 洋

宋代に編纂された『和剂局方』は以後の中国伝統医学に多大な影響を与えた国定処方集である。今日頻用される漢方処方のうち本書を出典とするものは少なくない。およそ医薬古籍の内容を吟味し、また実際に応用するにあたっては、まず現伝の諸本について可能な限りの資料を求め書誌学的検討を加えることから始めなければ十分な成果は得られないと考える。『和剂局方』の通行本は今日、日中ともすべて後代の十巻本に基づくものである。ところが我国幕末の書誌考証学の精華『経籍訪古志』には「宝櫃之秘」と賞される南宋版の五巻本が挙げられている。以後この書についての調査報告をみないが、演者はその必要性を感じ、宮内庁書陵部にそれを求めて検討を行ない、通行本との異同を明らかにしたので報告する。

『経籍訪古志』は『和剂局方』について第一に「増広校正和剂局方第五巻、南宋槧本、聿修堂蔵」なる版本を挙げ、一葉半余りにわたって解題する。例によって版式を記し、各巻目を示したのち、同書に多紀元胤が補綴した跋文を長文にわたり引用。跋文の内容は『医籍考』収載の同書の解説と大筋のところ相同する。この跋文は文化一三（一八一六）年に記されたもので、それによると乙丑（一八〇五）年に姫路大夫の川合元昇が京都の書店にて購求し、元胤の父元簡に贈ったものであるという。

多紀氏江戸医学館の蔵書は維新後いくつかの所轄を経て明治一八年に内閣文庫に入ったが、同文庫の貴重書は同二四年に宮内省図書寮に移管。現在の宮内庁書陵部に至る。本書も宋版の故をもって移管図書となった。ところが、幕末、江戸医学館に全冊揃であったはずの本書は、宮内省移管時点で既に巻一・五の首尾二冊が欠けていた。これは移管目録の記載により明らかである。維新直前から大政官文庫に至るまでの間、医学館旧蔵書の管理はさほど厳重ではなかったらしく、流出したものがあつたことはかつて報告した。本書の欠失部もそれで、首尾を欠くのも人為的所業で

あることを示唆している。

このように書陵部現存本は卷二・三・四で六割方を残す。書題・版式は『経籍訪古志』の記述と一致し、毎巻首に「多紀氏蔵書印」「江戸医学蔵書之記」の二印があるから、『訪古志』所載本であることは疑う余地がない。

『和剂局方』は北宋末に初刊され、南宋時、数度の増改を受けた。その経緯は次の通り。①『校正太平惠民和剂局方』五卷、大観中(一一〇七—一一一〇) 陳師文・裴宗元・陳承ら校正。②『増広校正和剂局方』五卷、紹興中(一一三一—一一三二) 呉直閣新增諸家名方。③『増広太平惠民和剂局方』十卷、嘉定元(一一二〇—一一二一)年、許洪新增。またさらに④宝慶中(一二二五—一二二七)、⑤淳祐中(一二四一—一二四二)に新処方が増添。したがって現行本は、**A**原方(三〇一方) **B**紹興統添方(七二方) **C**宝慶新增方(七六方) **D**淳祐新添方(四一方) **E**呉直閣増諸家名方(一二六方) **F**統添諸局經驗秘方(二八〇方)の六時期の処方群、計七九六方を収載。これに對しこの南宋版は、**a**原方、**b**諸家名方の二群(現存処方 **a**一九三方、**b**七〇方)である。

現行十卷本と南宋版五卷本との巻目の関係は、前者の巻

一・二が後者の巻一に、同じく三・四・五が二に、六・七・八が三に、九が四に、十が五に相当する。双方の処方を南宋版の現存部について対比したところ、**a**と**A**が一七二方、**a**と**B**が一九方、**a**と**E**が一方、**b**と**A**が一方、**b**と**D**が二方、**b**と**F**が六五方、それぞれ対応するといういささか予想外の結果を得た。元胤はこの南宋版の編纂期を呉直閣以降、嘉定改元以前、高宗・孝宗兩朝間(一一二七—一一八九)と審定した。穩当な見解と思われるが、これを前提とすれば現行本は数度の改訂によって各処方群間に錯乱を来していると言い得ることができ、南宋版の存在価値は高い。

さらに、両本の文字を対校した結果、かなりの字句の異同が認められた。この点からも南宋版は『和剂局方』の旧態をうかがう上で唯一無二の貴重本である。

方剤の出典を記すとき、通常一律に『和剂局方』と示されるのみであるが、それぞれ統添の時期は異なるのであるから、厳密には区別されるべきであろう。たとえば昨今大衆漢方胃腸薬の基本処方としてはやされる安中散を「北宋の『和剂局方』に収載されていた」かの如く記した

ものも見うけるがこれは誤りで、この南宋版の時点でも未収載である。通行本中には続添の区別を示さない粗悪なものもあるので注意を要する。なお、欠失部については幕末の摹本も残されていないので今のところ具体的内容について知るすべはない。

ともかく、この南宋版は残欠本といえども『和剂局方』を扱う際には必見の文献であり、広く認識されてしかるべきである。

元胤が本書に「先君子収儲医経経方之書必貴真本者豈類藏古玩家僅得柴窯残器奉為至宝耶今若茲本又非徒宋雕可以珍重也」と跋したのはいかにも至言である。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

## 『医心方』の伝写について (Ⅲ)

杉立義一

『医心方』安政本巻第卅の札記の末尾には次の識語がある。延慶本此末有康頼永観二年十一月廿八日撰此書進公家長徳元年四月十九日逝去歳八十四延慶二年酉十一月十三日写之畢四十八字”

森立之の『医心方提要』および多紀元倍の『医心方掌記』によれば、安政の初頭、半井家には二種の『医心方』写本が蔵有されていた。一つは正親町帝より下賜された康頼原撰本であり(ただし愚見では康頼原撰本ではなくて天養二年に宇治本を移点した新抄本と考える)。全巻が卷子本で、この半井本卅巻が幕府医学館にもたらされたのは安政元年十月十三日である。他は延慶二年十一月十三日に写し畢った抄本であり、冊子本で半井別本または延慶本と称され、これが医学館にあらわれたのは安政二年三月十一日であった。